

擬古詩としての蘇東坡「和陶」詩

鈴木 敏 雄
山田 小百合

一

北宋の黄山谷（庭堅一〇四五—一一〇五）は、黔南にいた際、蘇東坡（軾、字は子瞻一〇三七—一一〇二）が惠州に在って陶淵明の詩すべて（一百有九篇）に和し終わつたと聞き、「跋子瞻和陶詩」詩（偈）を作つて、その中で次のように評している。

子瞻謫海南、時宰欲殺之。飽喫惠州飯、細和淵明詩。淵明千載人、子瞻百世士。出處固不同、風味亦相似。（子瞻海南に謫せられ、時の宰之を殺さんと欲す。惠州の飯を喫するに飽き、細かに淵明の詩に和す。淵明は千載の人、子瞻は百世の士。出處は固より同じからざるも、風味は亦た相似たり。）

蘇東坡の「和陶」詩はその揚州時代（五十七歳）から始まり、貶処での儋州時代（六十二〜六十五歳）で終わっているが、その間、とりわけ、左遷の身となつた惠州時代（五十九〜六十二歳）以降は、右掲の黄山谷評に見られるように、「風味は亦た（淵明に）相似たり」と評されるに至っている。（後には更に「淵明と異なる無し」とも評される。）

その蘇東坡「和陶」詩は、後述するように、蘇東坡自らの貶処での生活を陶淵明の田園隱棲生活に比擬したもので、「和陶」という題そのもの

のも物語るように、どの一首を取っても、陶淵明の一首々に当然のことながら好く似せている。

ところで黄山谷は、蘇東坡が惠州以前の揚州に在って初めて作つた「和陶」詩については、次のようにも評している。

東坡在揚州和「飲酒詩」、只是如己所作。至惠州和「田園詩」、乃與淵明無異。（東坡揚州に在りて「飲酒詩」に和するも、只だ是れ己が作る所のごときのみ。惠州に至りて「田園詩」に和すれば、乃ち淵明と異なる無し。宋、胡仔『漁隱叢話』前集卷四引）

蘇東坡が「和陶」に着手した当初の作に対する評であるためか、「己が作る所のごとし」すなわち蘇東坡自身の徒詩と変わらず、陶淵明とは異なるとの指摘をする。それは一体どのような事を物語っているのか。本稿ではその点について些かの考察を加えてみたい。

二

そもそも「和陶」詩という「追和」形式（古詩に対する「次韻」による「和韻」形式）の詩は、これも後述するように、先ずは唱和相手の「意」に似せつつ合わせようとする、いわば「擬古」詩の一種であつて、制作動機から見ても、異なる（似せない）ことを予定してはいない。結果と

して似ていないと評されるのであれば、それは似せなかったのではなく、似せられなかったことになる。

蘇東坡自身は、自らの「和陶」詩について、次のように語っている。

古之詩人有擬古之作矣、未有追和古人者也。追和古人、則始於吾。

(古の詩人に擬古の作有るも、未だ古人に追和する者有らざるなり。

古人に追和するは、則ち吾に始まる。蘇子瞻「和陶淵明詩集引」引)

これは、「追和」という試みは確かに自らを嚆矢とする新機軸ではあるけれども、「擬古」詩とはまた異なる「追和」という別ジャンルの詩を試みたと言っているのではなく、「擬古」詩作成の際に、より原詩に近づけるために、新たに「追和」形式という一つの工夫を凝らし、それを有効に使うて更に似せたということを行っていると思われる。

「和陶」詩はもとより「擬古」詩の一種であって、当初より陶淵明に合わせ似せることを予定しているのでなければ「和陶」というに値しない。それを黄山谷は、揚州時代の「和陶」詩に限って、陶淵明に似ていないと評する。

本稿では、「追和」詩は本来「擬古」詩の一種であるという観点から、蘇東坡の揚州時代の「和陶」詩について、黄山谷評を承けつつ、今一度見ておきたい。蘇東坡の「和陶」詩作成の当初の制作意図も、幾分か垣間見られるように思われる。

三

「追和」の「和」とは本来、先ずは「意に和す」ものである。南宋の劉克莊(後村一一八七—一二六九)は、次のように言う。

昔之和詩者、和意而已。惟皮陸必和韻。(昔の和詩は、意に和するのみ。惟だ皮・陸のみ必ず韻に和す。『後村先生大全集』巻第一 百八十六)

もともと「意に和す」すなわち先覚の意に合わせるものである以上、すでに「擬古」詩の一種であると言つて好い。それは唐の皮日休・陸龜蒙の「和韻」技法を用いた唱和詩以前から、すでにこのジャンル制作上の大前提となっている(注1)。その点は皮・陸はもとより、蘇東坡も承知していなければならない。もしも仮りに「意」を差し置いて「韻に和す」のみであるなら、そもそも「和陶」とは言えない。

元の郝經(一二二六—一二七八)も、次のように言う。

賡載以來、倡和尚矣。然而魏晉迄唐、和意而不和韻、自宋迄今、和韻而不和意。皆一時朋儔相與酬答、未有追和古人者也。獨東坡先生遷謫嶺海、盡和淵明詩、既和其意、復和其韻。追和之作、自此始。……(賡載より以來、倡和尚ばれり。然り而して魏晉より唐に迄び、意に和するも韻に和せず、宋より今に迄び、韻に和して意に和せず。皆一時の朋儔相與に酬答し、未だ古人に追和する者有らざるなり。独り東坡先生のみ嶺海に遷謫せられ、尽く淵明の詩に和し、既に其の意に和し、復た其の韻に和す。追和の作、此より始まる。……)

「和陶詩序」(注2)

宋代に於いて「韻」のみに和する詩人があったとしても、蘇東坡は「意に和す」という「擬古」の面を疎かにしてはおらず、それに該当しない。

四

「和韻」詩は唐の皮・陸を鏑矢とし、宋代以降、「韻に和す」ことは定着している。それは詩が、一篇全体が韻律面に於いて均整が取れていること（「至音」）を求めるのみならず、押韻部分でも印象的に急き立てる、律動的な拍動を生ずる効果（「促節」）をも狙ったことに因ると言う。宋の歐陽守道（淳祐元年（一二四一）の進士、卒年六十五）は唐の李徳裕の「文章論」を引き、次のように言う。

沈休文長於音韻、自謂「靈均以來、此秘未覩。」唐李徳裕非之、以爲「古辭如金石琴瑟、尚於至音。今文如絲竹鞞鼓、迫於促節。」大概謂韻局則句累、不若不韻之爲愈也。夫自局於韻、猶病累句、況一用他人之韻、不局且累乎。唐人於詩、和意、不和韻、亦曰和詩固不必韻也。近世往往以和韻爭工、甚則有追和古作全帙無遺。如東坡之於靖節翁者、語意天成、一出自然、不似用他人韻也。由此言之、才力有餘、雖用他人韻、亦復何局之有、況自用韻而自病其局乎。徳裕之論正矣、亦未可以概評也。……（沈休文は音韻に長じ、自ら「靈均以來、此の秘未だ覩ず」と謂ふ。唐の李徳裕は之を非とし、以て「古辭は金石琴瑟のごとく、至音を尚ぶ。今文は絲竹鞞鼓のごとく、促節に迫らる」と為す。大概ね謂へらく韻局らるれば則ち句累られ、韻せざるの愈ると為すに若かざるなりと。夫れ自ら韻に局られてすら、猶ほ累句を病む、況んや一ら他人の韻を用ゐて、局られ且つ累られざるをや。唐人の詩に於けるは、意に和し、韻に和せず、亦た曰く詩に和するは固より必ずしも韻ならざるなりと。近世往々にして韻に和するを以て工を争ひ、甚だしきは則ち古作に追和して全帙遺す無き有り。東坡の靖節翁に於けるがときは、語意天成、一ら

自然より出で、他人の韻を用ゐるに似ざるなり。此より之を言へば、才力に餘り有れば、他人の韻を用ふと雖も、亦た復た何の局らるること之有らんや、況んや自らの韻を用ゐて自ら其の局らるるを病むをや。徳裕の論は正しきかな、亦た未だ以て概評すべからざるなり。……。「陳舜功詩序」（注³）

「擬古」詩にさらに「和韻」という技巧を凝らすことにより、和詩が、却つて他人の押韻に拘束されて詩句の意が天成自然を損なう「累句」になりかねないリスクを冒しながらも（注⁴）、より斬新な効果を得ようとしたことが知られる。しかも蘇東坡は、同時代の者同志の唱和である皮・陸以降の和詩とは異なり、時代を超えて和し（すなわち「追和」）、右掲のように、自らがその鏑矢であることを自負するまでに至つていて、その数少ない成功者であるとも評される。その際の蘇東坡の作は、「累句」にはなつてはいないと言える以上、「韻」に「和」し、もとより「意」にも「和」していて、加えてそれが天成自然になつていなければならぬ。それを黄山谷は、揚州時代の作に限つてそうではないと見た。蘇東坡が陶淵明に似せようとした際、そもそも何が要因となつて黄山谷の好評を得られなかつたのか。以下には、その点を具体的な作品に於いて見たい。

五

揚州時代の蘇東坡は、「和陶」詩着手当初であるとは言え、「和陶」を思い立った際には、「擬古」というジャンルを用いて、自らを極力陶淵明に似せるべく詠もうとしたと思われる。決して陶淵明（という原詩）の「韻」だけに「和」し、陶淵明とは些か別個の「己れ」の「意」を詠むことに主眼を置くような新たな詩篇を試みようとはしていない。

蘇東坡の揚州時代の作には、黄山谷も挙げるように、「和飲酒」詩二十首がある。陶淵明は先ずその其一で、次のように詠んでいる。

衰榮無定在 衰榮は在るを定むる無く
彼此更共之 彼此更ごも之を共にす
邵生瓜田中 邵生は瓜田の中なれば
寧似東陵時 寧ぞ東陵たるの時に似んや
寒暑有代謝 寒暑に代謝有り
人道每如茲 人道も毎に茲のごとし
達人解其會 達人は其の会するを解すれば
逝將不復疑 逝くゆく將た復た疑はず
忽與一觴酒 忽ち一觴の酒に与かれば（觴一作樽）
日夕歡相持 日の夕べ相持するを歡べり

これに対して蘇東坡は、次のように和している（合わせ似せている）。

我不如陶生 我は陶生に如かず
世事纏綿之 世事之に纏綿たり
云何得一適 云何にか一たび適ふを得
亦有如生時 亦た生ける時のごとき有らん
寸田無荆棘 寸田に荆棘無ければ
佳處正在茲 佳處は正に茲に在らん
縱心與事往 心を縦いままにして事と往かば
所遇無復疑 遇ふ所は復たとは疑ふ無し
偶得酒中趣 偶たま酒中の趣きを得なば
空杯亦常持 杯を空にするをば亦た常に持せん

今、この兩者を比較し、隔句末の「之・時・茲・疑・持」という五つの「韻」字のみを同じであると認めつつ、では、その「意」はというと、詠い出しからして陶淵明は誰にでも「衰榮」があると詠み、蘇東坡は自分分は「陶生」（淵明）に及ばないと詠んでいて、兩者全く異なり、「和」していない、すなわち似せることなく、蘇東坡は「己れ」独自の生活を和詩で詠もうとしている、と看做してしまふと、それは逆に兩者の差異を見出だすことになり、蘇東坡が「和す」と言っている意図に反する読みをすることになる。「和す」と言っている以上は、それは措き、「意」に和し、併せて「韻」にも和していると先ずは読む必要がある。

先ず「韻」について見ると、蘇東坡は隔句末の五つの韻を原詩に同じくすることにより、原詩の持つている拍動の律動感、韻律の「促節」感をこの和詩でも得ようとする。その際、他人の韻を借りることによって局束（局促）され、逆に効果を削いでしまうようなことが有れば、それはこじつけ（累句）となり、似ていない一つの要因ともなり得る。

例えば第一韻の押韻箇所「纏綿之」は、当時としては比較的新しい措辞で成っている。同時代、同じく宋の鄭剛中『周易窺餘』卷三に「鷓鴣取茅爲巢、以桑根纏綿之、以備風雨、而堅固其室。」（鷓鴣は茅を取りて巢と爲し、桑の根を以て之に纏綿し、以て風雨に備へ、而して其の室を堅固にす。）と見える。ただしそれは、桑の木の根を絡ませて鳥の巢を補強することを意味し、蘇東坡のような世事の悶着を意味しない。今、第二韻以下の韻字を含む「如生時」、「在茲」、「無復疑」、「常持」という各押韻部分の措辞を見ると、歴代多用されて来ているものなので、もしも天成自然でない「促節」感を与える押韻が有るとすれば、それはやはり一つ目の「纏綿之」であろう。しかしそれも、陶淵明の「余嘗學仕、纏綿人事」（余嘗て仕ふるを学び、人事に纏綿たり。「祭從弟敬遠文」）を踏まえると見れば、即座に「累句」であるとは言い切れず、むしろ天成の韻と言うことも出来る。

では、「意」の面はというと、初句を見た場合、陶淵明が「衰榮は定在無し」と詠む所を、蘇東坡は「我は陶生に如かず」と詠んでいるので、一見まったく似ていない。このような初句を以て始まる蘇東坡のこの「和飲酒」其一是、全二十首中の冒頭に置かれるため、「和陶」を行なう事への序章の役割をも担っている。その様な役目を負わせた上で、その表現を更に「擬古」の形で陶淵明の其一に合わせ、似せることを蘇東坡は、しようとしていると読む必要がある。それには、陶淵明の初二句「衰榮は在るを定むる無く、彼此更ごも之を共にす」に対して、蘇東坡が「我は陶生に如かず、世事之に纏綿たり」で類似代替し、陶淵明の「意」に合わせ似せようとしていることが明確にならなければならない。

今、初二句を見ると、陶淵明は自他かまわず世のなか誰にでも「衰榮」は訪れる、と人一般に起こり得る境遇を詠む。この句に関して黄山谷も「『衰榮無定在、彼此更共之』此是西漢人文章、他人多少言語、盡得此理。」（……此れは是れ西漢人の文章なり、他人の多少かの言語にして、尽く此の理を得んや。『詩人玉屑』引）と言うように、蘇東坡はそのような警句（「理」）を我がものとしている陶淵明に自分は及ばないと承けた上で、自分には衰榮を生じさせる煩わしい世事がまだ纏わり付いていて、それでも何とか陶淵明の境地に近づきたい、と詠んで行く。すなわち、人は誰しも衰榮が有るといふ陶淵明の得た人生觀を、その一現象である世事が自分にも纏わり付いているという蘇東坡自身の目下の人生の述懐で類似代替させようとしている。そのように看做すことが出来れば、それは陶淵明の「意」に「和」していると言えるのではないか。

以下、蘇東坡は陶淵明が入手し到達したのと同じ嘗ての東陵侯邵平の榮衰の果ての瓜田生活を自分も嘗て行きたいと詠む。その際、陶淵明の「邵生は瓜田の中なれば、寧ぞ東陵たるの時に似んや」を承け、「云何にか一たび適ふを得、亦た生ける時のごとき有らん」と言う。すなわち陶淵明が「衰榮」の例として挙げた「邵生」の生活を、蘇東坡は自らが

理想とする「陶生」（淵明）の「生ける時」（生前）の生活を捉えることで承け、陶淵明同様に自らが到達したい境地を詠んで行く。

そこで、陶淵明の詠む邵平の瓜田生活を手に入れるために、蘇東坡は「寸田に荆棘無ければ、佳処は正に茲に在らん。心を縦いままにして事と往かば、遇ふ所は復たとは疑ふ無し」と詠む。陶淵明が「寒暑に代謝有り、人道も毎に茲のごとし。達人は其の会するを解すれば、逝くゆく將た復た疑はず」と詠み、「達人」（邵平）は瓜田生活を通して天道の代謝に合わせる事が出来、人道の成り行きが分かっている者だと言ったのを承け、蘇東坡は我が「寸田」の「荆棘」を刈り、「事」の成り行きに合わせて「心を縦いままにし」、出会う物事に対して「疑ひ」が湧かないようにすれば、達人の境地は手に入るとする。そして邵平の瓜田生活にも等しい自らの寸田修養に於いてその境地に到達しようとする。

なお、その際の「寸田」とは、「田」は「田」でも、道書の『黃庭内景經』に「但當吸氣煉子精、寸田尺宅可治生。」（但だ当に氣を吸ひて子が精を煉るのみにして、寸田尺宅は生を治むべし。）とある「三丹田」（両眉間を上丹田、心を絳宮田、臍下三寸を下丹田と謂ひ、各々方一寸なり）の一つを言う（因みに「尺宅」は、面をいう）。道家はその「寸田尺宅」説に基づいて「寸田尺宅可理生、外物不干泰而平」（寸田尺宅は生を理むべし、外物干さざれば泰らかにして平らかなり）とし、丹田を鍛えて長生を得る「養生引年」を求める。その「寸田尺宅」を蘇東坡は、「養氣如養兒、棄官如棄泥。人皆笑予拙、事定竟難迷。歸耕獨患貧、問予何所齋。尺宅自足芘、寸田有餘畦。明珠照短褐、陋室生虹蜺。……」（氣を養ふは兒を養ふがごとく、官を棄つるは泥を棄つるがごとし。人皆予の拙なるを笑ふも、事の定まるは竟に迷ひ難し。歸りて耕すは独り貧なるを患へば、予に問ふ何の齋する所ぞと。尺宅は自ら芘ふに足り、寸田は餘畦あり。明珠は短褐を照らし、陋室は虹蜺を生ず。……。「贈王仲素寺丞」詩）等と用い、実践もしている。それは東陵侯の瓜畑のような

実際の田畑ではなく、「丹田」すなわち心を耕すことを言う。ここもそのような老荘思想の表現であって、いわば抽象的に類似代替（似せ、合わせようと）していることになる。しかも蘇東坡のそのような表現は、歴代の注釈者が『黄庭經』が出典であると指摘するように、思想を背景に持つ典故であることも認められる。

かくして陶淵明と同じ「復たとは疑ふ無し」の境地に蘇東坡も到り、陶淵明が結二句で「忽ち一觴の酒に与かれれば、日の夕べ相持するを飲べり」と言う所を、蘇東坡も「偶たま酒中の趣きを得なば、杯を空にするをば亦た常に持せん」と言い、詩題に沿った「飲酒」の真の飲びを陶淵明と共有するに至っている。

詠い出しからして相離れているかに見える両者の詠ではあるが、その表現の背景を探索してみると、この「飲酒」其一では蘇東坡は陶淵明の「意」に極力「和」そうとしていることが見えて来るのではないか。

そして、紙幅の都合上詳述しないが、この其一を冒頭に置く蘇東坡揚州時代の作である「和陶」当初の作「和飲酒」詩全二十首は、以上のように見ると、そのほぼ半数がこの其一に見るような傾向を示していることが分かる。蘇東坡が「和陶」の当初から自分の生活の中に陶淵明的なものを見出だし、陶淵明の意境に迫ろうとして、自分の生活を、或いは存在を「擬古」詩形式で再構築していることはほぼ明らかであるように思われる。とりわけ「和飲酒」其十三は、歴代の注釈者も施注しているように、仏教思想を色濃く滲ませ、それによって陶淵明の深層（老荘哲学）にまで迫ろうとしている。蘇東坡のその様な意図を酌むと、黄山谷評「己が作る所のごとし」はその意図にそぐわないように思われて来る。

六

ところが、必ずしもそのようには言い切れない作も、蘇東坡「和飲酒」

詩二十首中にはある。例えば陶淵明の原詩の著名度が高い其五を例に取りたい。先ず、陶淵明は次のように詠む。

結廬在人境	廬を結びて人境に在り
而無車馬喧	而も車馬の喧しき無し
問君何能爾	君に問ふ何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏	心遠ければ地自ら偏なればなり
採菊東籬下	菊を採る東籬の下
悠然見南山	悠然として南山を見る
山氣日夕佳	山氣日夕に佳く
飛鳥相與還	飛鳥相与に還る
此中有眞意	此の中に眞意有り
欲辯已忘言	弁せんと欲して已に言を忘る

そして蘇東坡はこれを承け、次のように和している。

小舟眞一葉	小舟は真に一葉
下有暗浪喧	下には暗き浪の喧しき有り
夜棹醉中發	夜に棹さして醉中に発てば
不知枕几偏	枕几の偏るを知らず
天明問前路	天明けて前路を問へば
已度千重山	已に千重の山を度れり（重一作金）
嗟我亦何爲	あゝ我亦た何をか為さんや
此道常往還	此の道をば常に往還す
未來寧早計	未來は寧ぞ早に計らん
既往復何言	既往も復た何をか言はんや

和詩の「韻」について見ると、一つ目の韻を含む「浪喧」という語は、すでに唐の積齊已に「三峡浪喧明月夜」（三峡浪喧しく明月の夜。「送王處士遊蜀」詩）という表現が見られることから、それを押韻箇所用いた蘇東坡の「暗浪喧」という措辞も、表現の自然を損なうものとなる可能性は少ない。では、第二韻の「枕几偏」はどうかというと、これは管見の及ぶ限りでは蘇東坡以前に用例を見ない。その他、三韻目以下の「千重山」（一作「千金山」）や「往還」、「何言」の措辞は、第一韻同様に古くから多用されているので、もしも押韻による局束が問題にされるとすれば、その第二韻「枕几偏」ではないか。

「枕几」は、例えば宋の李觀（泰伯）に「……振衣託歸舟、河流迅孤矢。淮清江且平、踰月在枕几。……（……衣を振ひて帰舟に託せば、河流孤矢より迅し。淮清くして江は且く平らかなれば、月を踰えて枕几に在り。……。「寄祖秘丞（龍學）詩」とある等、宋代以降は、蘇東坡の當時も含め、舟中の調度品の一つにもなっている（注5）。ただし使用例が多くない。しかもそれが蘇東坡以外に用例を見ない「枕几偏」という措辞で用いられているとなると（注6）、天成とは言い難く、無理のある「累句」とされる可能性を孕んでしまうことになる。

ともあれ、そのようなリスクを冒しながらも、原詩の韻律による「促節」感の効果を期しつつ、さらにその「意」に合わせようと、蘇東坡は努めている。そこからは蘇東坡が自らの生活をどのように陶淵明の生活に比擬しようとしたのかが見えて来ると思われる。

次には、この「飲酒」其五の原詩と和詩の、両者の「意」に於ける（相違点ではなく）類似点を、以下、その「意」のまとめである二句一聯あるいは四句一段落ごとに、具体的に見たい。

a

先ず冒頭の二句であるが、蘇東坡は、陶淵明の「廬」に於ける生活を、自らはその「小舟」に於ける生活で類似代替させようとする。「小舟」は蘇東坡が南方揚州の貶処での日常、行く先々で生活の具として利用したもので、これまでもそれで赤壁まで出かけたなり、その中で飲酒したりもしている。それは、次の句等により好く知られる。

……我行本無事、孤舟任斜横。中流自偃仰、適與風相迎。舉杯屬浩渺、樂此兩無情。……（……我が行本より事無く、孤舟は斜横するに任ず。中流自ら偃仰し、適たま風と相迎ふ。杯を挙ぐるは浩渺たるに属し、此の両つながら情無きを樂しむ。……。「晚入飛英寺、分韻得月明星稀」四首之二、四十四歳、湖州）

今日舟中無他事、十指如懸槌、適有人致嘉酒、遂獨飲一杯、醺然徑醉、……（今日舟中他事無く、十指槌を懸くるがごとし、適たま人の嘉酒を致す有れば、遂に独り一杯を飲み、醺然として径ち酔ふ、……。「答賈耘老」四首之四）

壬戌之秋、七月既望、蘇子與客泛舟、游於赤壁之下。……而吾與子之所共適。客喜而笑、洗盞更酌。肴核既盡、杯盤狼籍、相與枕藉乎舟中、不知東方之既白。（壬戌の秋、七月既望、蘇子客と舟を泛かべ、赤壁の下に遊ぶ。……而して吾と子の共に適ふ所なり。客喜びて笑ひ、盞を洗ひて更に酌む。肴核既に尽き、杯盤狼籍たれば、相与に舟中に枕藉し、東方の既に白むを知らず。「前赤壁賦」、四十歳、黄州）

蘇東坡に於けるこのような「舟（舟中）」の生活は、時に「舟中熱倦」（舟中は熱く倦む。「與劉器之」詩）、「數日熱甚、舟中揮汗」（數日熱きこと甚しく、舟中汗を揮ふ。「與子由」二首之二）等と不快を訴えたりすることも併せ、ある種の閑適な場となつてゐる。したがって、和詩の冒頭で「暗く騒がしい波浪のごとき人の世に、静かに一艘の小舟を浮かべてゐる」と詠むのは、陶淵明が車馬の往来の騒がしい人境の中で、園田と一体化し、静かな「廬」ぐらしをしていると詠むのに等しい（注7）。後述するが（c ii）、その点こそ、陶・蘇両者ともに、いわば「飲酒」によつて「無意」「忘情」の境地に到り得てゐると言われる部分である。

b

次に、三・四句目で陶淵明は、「人境」という周囲の騒がしい「廬」ぐらしでも、飲酒による「心遠し」という心的状況下に自らを置くことにより、あたかも田舎暮らしのように閑かさが保たれることを詠む。それは、晋の王康琚の言う「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」（小隱は陵藪に隠れ、大隱は朝市に隠る。「反招隱」詩）、劉宋の周續之の言う「情致兩忘者、朝市亦巖谷耳」（情と致きと両つながら忘れれば、朝市も亦た巖谷なるのみ。『廬山記』『蓮社高賢傳』）等のような魏晋以来の玄学を踏まえたものであると言われる。

その点を蘇東坡は「舟中」の酔境で類似代替させ、「酔いつぶれて寝込んだ真夜中の舟出ゆえ、その間のことは分からない」と詠む。『莊子』達生篇の「夫醉者之墜車、雖疾不死」（夫れ酔ふ者の車を墜つるは、疾むと雖も死なず）を思わせるが、酔境に在れば、波の騒がしさによつて安穩が妨げられるような状況には陥らない。無論、心境も陶淵明同様、波立たない。それを以て蘇東坡も自らを「心遠し」の境地に近づいてい

ると看做してゐるであろうことは、推測に難くない。

c i

そして、「夜が明けて行き着いた先を問うと、もう幾重もの山を通り過ぎていた」と蘇東坡は五・六句目で続ける。陶淵明の田園生活に於ける「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」という境地を、舟中の生活である「天明けて前路を問へば、已に千重の山を度れり」という句で類似代替させたことになる。この点は注視に値しよう。

蘇東坡は「臘梅贈趙景貺」詩でも「醉中不覺度千山」（醉中覺えず千山を度る）と詠み、「千山を度る」際の「醉中覺えず」の境地、酔境に在つては無我であることを強調する（注8）。ここもそれと同様、世間の荒波にも喩えられる「暗き浪」の喧噪を枕几の彼方に逐い遣つた（陶淵明と同じく悠然たる）無我の境地に在ることを言うものと考えられる。

その際の「度：山」という語は、鮑照「學劉公幹體」詩に「胡風吹朔雪、千里度龍山」（胡風朔雪を吹き、千里龍山を度る）とあり、また古樂府の「相和歌」には「度關山曲」（関山を度るの曲）も有るように、随分の距離を旅することを意味し（注9）、蘇東坡自身もこれらを踏まえ、「幾處繁回度山曲、一時清駛滿江東」（幾處か繁り回りにて山曲を度り、一時の清駛江東に滿つ。「舶越風」詩）、「西行度連山、北出臨漢水」（西のかた行きては連山を度り、北のかた出でては漢水に臨む。「萬山」詩）、「一夜東風吹石裂、半隨飛雪度關山」（一夜の東風石を吹きて裂き、半ば飛雪に随つて関山を度る。「梅花」二首之一）等と、屢々用いてゐる。

しかもそれは、遠く旅することを具体的に述べるのと同時に、用いられた方によつては、次の唐の釈道世『法苑珠林』に見られるような「諸山を度る」や「雪山を度る」という、仏教思想に於いて修行し艱難辛苦を

乗り越える比喩的な意味をも含ませることが出来るようにも思える。

宋江陵辛寺有釋法顯、……發自長安西度流沙、……。有頃至葱嶺。葱嶺冬夏積雪、有惡龍吐毒、風雨沙礫、山路艱危、……。次度雪山、山遇寒風暴起、……（宋の江陵辛寺に釋法顯有り、……長安より發して西のかた流沙を度り、……頃有りて葱嶺に至る。葱嶺は冬夏雪を積み、惡龍の毒を吐く有り、風雨沙礫、山路艱危、……。次に雪山を度るに、山は寒風の暴かに起こるに遇ひ、……。『法苑珠林』卷三十四「引證部」宋沙門釋法顯）

……閻浮樹者、此樹生在閻浮提地、……時有一人、名曰長脛、本是王種、姓拘利氏、宿業果報、所得神通、若行水中、前脚未沒、後脚已移、若行草葉、草雖未靡、便得移步。是人從佛聞說此樹、即白佛言「我今行至閻浮樹不。」答云「得至。」是人禮佛、向北而去、度諸山、經過七山、第七名金邊山、登山頂、向北聳身遠望、唯見黑暗、怖畏而返。佛問「汝至閻浮樹不。」答言「不到。」佛問「汝何所見。」答曰「唯觀黑暗。」佛言「此黑暗色即閻浮樹。」……（……閻浮樹なる者は、此樹生じて閻浮提の地に在り、……時に一人有り、名づけて長脛と曰ふ、……是の人仏に従つて此の樹を説くを聞き、即ち仏に白して言ふ「我今行きて閻浮樹に至るや不や」と。答へて云ふ「至るを得」と。是の人仏に礼し、北に向かひて去り、諸山を度り、七山を經過す。第七は金辺山と名づけ、山頂に登りて、北に向かひて身を聳てて遠望すれば、唯だ黑暗なるを見るのみ、怖畏して返る。仏問ふ「汝閻浮樹に至るや不や」と。答へて言ふ「到らず」と。仏問ふ「汝何の見る所ぞ」と。答へて曰はく「唯だ黑暗を觀るのみ」と。仏言ふ「此の黑暗色こそ即ち閻浮樹なり」と。……『法苑珠林』卷七十九「樹果部」閻浮樹）

蘇東坡はそのような意味をも踏まえて「千重の山を度る」を、陶淵明の「悠然として南山を見る」の類似代替として見ることが出来るならば、陶淵明に「服菊増年」（菊を服して年を増す）という老莊思想の背景があるのを承け^{（注10）}、蘇東坡も「度脱、得度」の仏教思想を踏まえたこととすることで、重層的な陶淵明の哲学（「意」によりいつそう「和」するための裏打ちまでしていると看做せるのではないか。ただしここは、歴代の注釈家がそのような注を施していない箇所でもあり、仏教思想の典故は認められ難いかも知れない。

c ii

なお、蘇東坡が陶淵明の「飲酒」詩の境地を老莊思想の「意無し」（無意）、「情を忘る」（忘情）に浸っていると見ていたであろうことは、予め触れておいた（a）。それはこの「採菊東籬下、悠然見南山」の二句に関する蘇東坡の次の論による。

……東坡云「陶淵明意不在詩、詩以寄其意耳。……『采菊東籬下、悠然見南山』則本自采菊、無意望山、適舉首而見之、悠然忘情、趣閑而心遠。……（……東坡云ふ「陶淵明の意は詩に在らず、詩は以て其の意を寄するのみ。……『菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る』は則ち本より自ら菊を采り、意の山を望む無し、適たま首を挙げて之を見れば、悠然として情を忘れ、趣き閑かにして心遠し」と。……。宋、晁補之「題陶淵明詩後」（『鷄肋集』引）

彼哉嵇阮曹、終以明自膏。靖節固昭曠、歸來侶蓬蒿。新霜著疎柳、大風起江濤。東籬理黃華、意不在芳醪。白衣挈壺至、徑醉還遊遨。

悠然見南山、意與秋氣高。(彼なるかな嵇・阮ら、終に以て自らの膏を明るくす。靖節は固より昭曠、帰り来たりて蓬蒿を侶とす。新霜疎柳に着き、大風江濤に起く。東籬に黃華を理ふるも、意は芳醪に在らず。白衣壺を挈げて至れば、徑ち酔ひて還た遊遨す。悠然として南山を見、意は秋氣と高し。「題李伯時淵明東籬圖」詩(「白衣」は、刺史の王弘。))

ここで蘇東坡は「悠然として南山を見る」時の陶淵明の意境を、「意與秋氣高」(意は秋氣と与に高し)と捉え、「悠然忘情、趣閑而景遠」(悠然として情を忘れ、趣き閑かにして心遠し)と捉えている(「心」は「景」に作る)。秋の氣配の氣高さと、菊(葉草)を採って心はずでに南山に隱棲していると言う時の陶淵明の高遠な意境とが一致するものと蘇東坡は見ている。

従って、他でもないその意境に和する句として蘇東坡は「天明けて前路を問へば、已に千重の山を度れり」の句を当てたことになる。その点からも陶淵明と同等の悠然たる境地、蘇東坡自らが言う「趣き閑かにして心遠し」の境地を、蘇東坡自身も舟中の生活に見出だしていたと言えぬのではないか。

因みに、清の温謙山も「愚按、夜棹四語、恰是醒後自然流出、所謂眞得醉中趣者」(愚按ずるに、「夜棹」の四語は、恰も是れ醒後自然にして流れ出でたり、所謂眞に酔中の趣きを得たる者なり。『和陶合箋』)と言う。

以上のように見て来ると、黄山谷の言う「如己所作」(己が作る所のごとし)ではない、後の黄山谷評にはある「風味略相似」(風味は略ぼ(陶淵明と)相似たり)という高遠な境地を、すでに揚州での蘇東坡も表現し得ているのではないかと思えてくる(蘇東坡の生活は意図通りに組み替えられ、陶淵明のそれに合わせ得ているかに思える)。

d

かくして七・八句で「私はどうするわけでも無く、この道をいつも行き来する」と言い、蘇東坡は陶淵明の詠む毎日平安に山のねぐらに帰る「飛鳥」さながらの行動(生活)を自らも採っていることを言う。時が来れば、帰るべき所に帰ろうとすることを強調し、これも陶淵明に極力合わせ、似せようとしていることが分かる。

その際、陶淵明の詩句は『易』の「鳥反故巢」(鳥は故巢に反る)の哲学に裏打ちされている(注11)。蘇東坡はというと、「此道」でそれを承け、そこには哲学「道」が在ることを示唆する。陶淵明の結句「此の中に眞意有り」の示唆的(ambiguous)表現「此」の効果を、蘇東坡はここで用いている。

e

そして最後の二句で「未来は今すぐには分からないし、過去を論じた所で始まらない」という警句を提示し、蘇東坡は結びとする。今のこの時を成し遂げることが肝要なのであり、他に對しては何らの意志も情も起こらず、陶淵明のように「言を忘る」という意境に到達することでそれを成し遂げようとする自分が今この酔境の内在することを詠んでいゝ。それこそが蘇東坡の欲する「此の道」であり、それが更に「飲酒」という詩題と通底する一つのテーマとなつて浮上することになる。

この一首を含む「飲酒」二十首の冒頭に置かれる「引」に、蘇東坡は次のように記す。

吾飲酒至少、常以把盞爲樂、往往頽然坐睡、人見其醉、而吾中了然、蓋莫能名其爲醉爲醒也。在揚州時飲酒、過午輒罷、客去解衣槃

礪、終日歡不足、而適有餘、因和淵明飲酒二十首、庶以彷彿其不可名者、示舍弟子由・晁無咎學士。(吾酒を飲むこと至つて少きも、常に把盞を以て樂しみと為し、往々にして頽然として坐して睡る、人其れ酔ひたりと見るも、吾が中は了然たり、蓋し能く其の酔ふと為すか醒むると為すかを名づくる莫きなり。揚州に在りし時酒を飲み、午を過ぎて輒ち罷む、客去れば衣を解きて槃礴たり、終日飲び足らず、而して適たま餘有れば、因つて淵明飲酒二十首に和し、庶はくは彷彿として其の名づくるべからざる者を以て、舍弟子由・晁無咎學士(補之)に示さん。)

自らが酔っているのか醒めているのか髣髴として名状しがたい状態に在りながらも、吾が胸中は了然々たる状態に在ることを逆に意識化している。すなわちそこそが陶淵明の描く「飲酒」と異なる意境に蘇東坡も在ることになり、陶淵明の「意」に極力「和」そうと努めてはいると言えるのではないか。そのことを蘇東坡は「和陶」当初の揚州での「和飲酒」詩に於いて、すでに概ね実現し得ているように思われる。

七

揚州時代の蘇東坡は、州知事として凶荒や飢饉および朝廷の無策に苦しむ人民を救うべく奔走し、彼らの債務や滞納処分免除および免税を朝廷に度々上奏している。しかし当初は朝廷の理解を得られず、反対勢力による熾烈な妨害や仕打ちに何遍も遭っている。それにも拘わらず、蘇東坡は屈せず職務を成し遂げる。蘇東坡はすでに黃州時代(四十四〜四十九歳)に左遷の身として自ら田園生活を体験し、また精神修養のための養生法をも同時に身につけている(注12)。その後の揚州時代に為された陶詩への追和(「和陶」詩)は、それを更に確固たるものにするため

の嘗為ではなかったか。そしてそれは決して隱遁思想ではなく、むしろ逆に朝廷の反対勢力による熾烈な妨害や仕打ちにも心揺るがない哲学の確立であったと思われる。

陶淵明は自らの生活哲学を自らの詩に詠んでいる。蘇東坡もその陶淵明の生活哲学に真似るべく、自らの生活を陶淵明のそれに沿うように再構築し、組み替え、追和という形で自らの詩に詠んだ。それは単なる言葉の上の摸倣ではなく、逆に言葉という表層は似ていないか見えても、深層を探ればそっくりに作るう、そっくりに生活を再構成してみせようとの尽力が為されている。真似れば真似るほど、志向する哲学は確乎たるものとなつていったのではないか。それが「和陶」詩制作の一要因と言えるものであろう。

ただし、蘇東坡が和詩に取りかかった当初のその嘗為の半数は、見方によつては、陶淵明の有する玄学や老莊思想のような重層的な哲学に対する追慕の見えにくさを伴い、それらがやや希薄なものに映るかも知れない。もしもそのように映るのであれば、必ずしも成功したとは言えず、陶淵明の生活哲学の深部にまで当時の蘇東坡は追隨できず、あるいは表現できていないと看做され、結果として似ていないと評されてしまうこともあり得る。黃山谷が「己が作る所のごとし」と衝いて来たのは、或いはその辺りではなかったか。陶淵明の摸倣を開始して間もない揚州時代の「和陶」詩は、似せようとしているとは言え、一方でそのような傾向をも持つているとの指摘を、黃山谷評から受けたことになる。

注1、陸龜蒙の唱和詩は、皮日休詩に対する和韻(次韻)詩であり、同時に擬古形式にもなっている。例えば、皮日休が「添漁具詩五篇之一(漁菴)」詩で「菴中只方丈、

恰稱幽人住。枕上悉魚經、門前空釣具。束竿將倚壁、曬網還侵戶。上洞有楊顛、須留往來路。(菴中は只だ方丈なるのみにして、恰も幽人の住まふと称す。枕上は悉く魚經、門前は空しく釣具あり。竿を束ねて將に壁に倚せんとし、網を曬して還た

戸を侵す。上洞に楊顛有り、須らく往来の路に留まるべし。」と詠めば、陸龜蒙はそれに唱和して釣りは禪だとし、「奉和添漁具五篇之一（漁菴）」詩で、「結茅次烟水、用以資嘯傲。豈謂釣家流、忽同禪室號。閒憑山叟占、晚有溪禽嫪。華屋莫相非、各隨吾所好。」（茅を結んで烟水に次り、用ひて嘯傲に資す。豈に釣家の流と謂はんや、忽ち禪室の号に同じからん。閑なれば山叟の占ふに憑り、晚には溪禽の嫪^をしむ有り。華屋は相非とする莫く、各おの吾が好む所に随ふ。）と「意」を合わせている。

注2、「廣載」は、相續けて成す。古代の「廣載歌」に、帝の歌の美を継ぎ、同様に詩を成したものが有る（「廣續、載成也。帝歌歸美股肱、乃廣以成其美」）。

なお、「和韻」と「次韻」については、宋の劉攽『中山詩話』（『劉貢父詩話』）に「唐詩廣和、有「次韻」（先後無易）、有「依韻」（同在一韻）、有「用韻」（用彼韻不必次）。韓吏部（退之）和皇甫（湜）「陸渾山火」是也、今人多不曉。……」とある。

注3、「至音」と「促節」（節を短く切りつめる）については、それぞれ『淮南子』説林訓に「至味不慊、至言不文、至樂不笑、至音不叫、大匠不斲、大豆不具、大勇不闘」と見え、『文心雕龍』哀弔第十三に「結言揆詩、促節四言、鮮有緩句。」と見える。注4、「累句」とは、囚われ縛られ、伸びやかさを欠いた句。『後村詩話』卷九に「……之類、非無可説、但每篇多蕪辭累句、或爲韻所拘、殊欠條鬯。……」とある（「條鬯」は、伸びやかさ）。

注5、「枕几」は、古くは『禮記』に「父母舅姑之簾席枕几、不傳。」と見える。後世、明の白沙子（陳獻章）の詩には「安排枕几還公睡、已有關干信客凭。」と見える。注6 「枕几偏」の用例は見あたらず、「几偏」が後世、明の顧清「讀葉文莊病目詩有感」詩に「狼籍殘書硯几偏」と見える。

注7、陶淵明は『漢書』揚雄傳の「結以倚廬（結びて以て廬に倚る）を用いていると言ふ（龔斌『陶淵明集校箋』上海古籍出版社一九九六年）。

注8、「千重山」は、蘇東坡『祈雪霧猪泉』、出城馬上有作、贈舒堯文」詩に「三年走吳越、踏遍千重山。朝隨白雲去、暮與棲鴉還。……」と見える（蘇東坡には「次韻舒堯文『祈雪霧猪泉』詩もある）。なお、「千重山」は一に「金山」に作っている。

『阿含經』に「……所以名閻浮提者、下有金山、高三十由旬、由閻浮樹、故得名、……」と見え、また『法苑珠林』卷四十一に「須彌山有上下道、日於夏時、行於上道、路遠行遲、照千金山、故長而暑熱。日於冬時、行於下道、路近行速、照大海水、故短而極寒」と見える等、仏教色を帯びることになる。

注9、「度山」の例として王昌齡「出塞」詩に「秦時明月漢時關、萬里長征人未還。但使龍城飛將在、不教胡馬度陰山」とあるのは好く知られる。

注10、「服菊」の効能については、「王子喬服菊、増年變白」（唐、王焘『外臺秘要方』）、「道士朱孺子、吳末、入玉笥山、服菊花、乘雲升天」（『名山記』）、「神仙服菊花、延年不老」（宋、太宗御製『太平聖惠方』）等と見える。

注11、漢の焦贛『焦氏易林』解の卦に「鳥反故巢、歸其室家、心平意正、與叔相鳴、登高殞墜、失其寵貴」とある。

注12、林語堂『The gay genius』（合山究訳『蘇東坡』明德出版社一九七八年、張振玉訳『蘇東坡傳』長春時代文藝出版社一九八八年）による。